管内黒毛和種繁殖農家における分娩間隔短縮に向けての取り組み

東播基幹家畜診療所　丹波診療所
○芹生朋美　永岡正宏　田畑早智　門田文隆　今井正士

管内Q市では月一回の繁殖検診を実施してきたが､分娩間隔の延長が問題となっている。そこで分娩間隔の短縮を目標に繁殖成績、飼養管理の調査と血液検査、ビタミン測定、寄生虫検査を行い問題と改善点について検討した。

材料および方法

管内Q市の黒毛和種繁殖農家11戸(A～L農家)48頭について2015年8月に給与飼料、繁殖成績調査、血液検査、寄生虫検査を行い給与飼料の改善とビタミン投与を指導した。また同年12月に17頭で指導後の血液検査、寄生虫検査を行い、その結果から繁殖管理指導を実施した。飼養管理：DM、TDN、CPの充足率と農家の平均BCSから飼料給与の適正農家(4戸)、不足農家(3戸)、過剰農家(4戸)の3群に分類した。繁殖成績：農家の記録および牛群管理システムから分娩間隔、初回AI日数、各農家のAI率、のべ頭数受胎率、妊娠率を調査した。また各農家で、個体ごとの台帳管理がされているか、次回発情の確認がされているか、分娩後早期の繁殖検診受診がされているか、などの繁殖管理をスコア化し評価を行った。血液検査：TP、Alb、Glob、A/G比、AST、GGT、Glu、BUN、T-Cho、および血中ビタミンA、β-カロテン、ビタミンE濃度の測定を行った。寄生虫検査：全個体について検査を行った。

結果

繁殖成績は、農家ごとの分娩間隔が370.8～754.0日で、分娩間隔と受胎率との間に負の相関を認めた。初回AI日数については、AI率、受胎率との間に負の相関を認めた。また分娩間隔は給与飼料不足群に比べ過剰群で長い傾向にあった。繁殖管理スコアは､AI率、妊娠率、受胎率との間に正の相関が、初回AI日数とは負の相関を認めた。各血中ビタミン濃度は8月にほとんどの個体で低値を示したが、12月にはビタミンA、Eは一部で改善された。血液検査ではTP、Glob、GGTが高値を、Alb、A/G比、Glu、T-Choが低値を示したが、12月にはTP、Alb、Glob、A/G比、Gluが改善された。

まとめ

過剰な飼料給与がされている農家ではBCSが高く、繁殖成績が低下していた。繁殖管理が適正に行われている農家ほどAI率、受胎率が高く初回AI日数が短かった。そこで繁殖管理の改善を目的に個体別繁殖台帳を作成・配布し、繁殖カレンダーと合わせた活用を指導した。今後は給与飼料、ビタミン投与の指導も継続して行い、分娩間隔の短縮に努めたい。